

東京バッハ合唱団 月報

[第 606 号] 2012 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.606

December 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 107 回定期演奏会「クリスマス・オラトリオ」I-III

母語演奏、コラールに思うこと

高梨 公明 (団友、春秋社編集部)

あの感銘深い《ロ短調ミサ曲》から 1 年、今度は《クリスマス・オラトリオ》が聴けるとあって、楽しみにしていた。

……定刻になって合唱団、登場。いつもよりメンバーが増えている。会場にも多くの聴衆。これも 50 年の蓄積がたくさんの方を引き寄せるのだろう。そんなことを思いながらステージを眺めると、あれ、アルトの小さな女の子がいないな、どうしたのかなあ…。演奏が始まって、そうか、いつのまにか背が伸びていたんだ…。一生懸命声を合わせる姿をみてジーンときた。

今回もまた、バッハの日本語演奏、その大きな説得力に引き込まれることになった。言葉を越えたバッハ音楽の普遍のメッセージ。しかし、母語でこそ、そのメッセージがリアルに迫ってくることを改めて実感したものだ。

《クリスマス・オラトリオ》の第 2 部はこのほか美しい音楽情景がそこそこに描かれる。そして、日本語歌詞の絶妙な表現に、あらためて大村先生の偉業を思う。その格調高く、かつ的確な訳詞の表情が見事に音楽とマッチしているのだ。たとえば、第 19 曲のアルトのアリアは、さながら子守歌のように親しみ深く、第 21 曲の合唱にしても〈栄えあれ み神に〉〈地には平和 主の民に〉の発語（発声）がフーガ形式のなかでもごく自然と耳に入ってくる。第 23 曲のコラールに至っては、音楽と言葉が一体化しているようで、日本語から生まれた音楽のように感じた。子供の頃に馴染んだ「きよしこの夜」がごく日常のなかの愛唱歌であったように、適度に凝縮され、彫琢された日本語が原語の意味をそこなく直截に歌い手の、聴き手の胸を打つ。そのことは福音史家（テノール）のレチタティーヴォにもあらわれており、鏡さんはみごとに語り、歌いきっていた。

いつも思うことであるが、今回とくに、コラールというものが素朴な会衆歌であるということを知えられた。第 3 部の最後のコラールの訳詞はとくに印象深く迫ってきて、訳詞を味わえば味わうほどに、大村先生はここでも、原詩の本質をみごとに受け止め、訳詞のなかに魂を込めるかのようにして、言葉を紡がれているのがわかった。クリストフ・ルンゲの原詩はこうな

っている— "Seid froh dieweil,/ Daß euer Heil/ Ist hie ein Gott und auch ein Mensch geboren,/ Der, welcher ist/ Der Herr und Christ/ In Davids Stadt, von vielen auserkoren." それを先生は、〈よろこべ み神は/ いまこそ 人となり / 生まれたまいぬ/ われらが 主キリスト/ ダビデの村より/ いでたもう〉とされた。訳出されたというより、生み出されたというほうが適切だろう。その音楽は一音一音にたしかな発語（発音）で即応し、美しい四声体となって響き渡る。それと同時に、私がここで思ったのは、テキスト内容の降誕の喜びが表面的なそれではなく、どこか深い思想に裏づけされているということだった。なにより、その歌の表出（演奏）も決然としていることに思い当たった。喜びの表現であるとともに、信仰告白の決然とした思い。バッハ音楽の奥深い一面をコラールから知ることとなったのである。

アンコールの最後はいつものように、会場の皆ともうたう。第 23 曲のコラール。楽譜を見ながら、リズムと歌詞のアーティキュレートさえ見逃さずにいれば、四声体のどこかにあてはまるような気がして、私も思わず大声を出していた。そのときの大村先生のお話がまたいい。「プログラム冊子の最後に楽譜を載せたので、おうちに帰られたら、みなさんでどうぞ。器楽のところは何でもいいのですから、好きな楽器を持ち寄って楽しんでください…」。

次の公演は、《マタイ受難曲》とのこと。またあの明快な福音史家の語りを導きとして、宗教音楽の最高の名作を日本語演奏で堪能したいものだ。

【終了ご報告】

2012 年 11 月 9 日（金）、杉並公会堂

第 107 回定期演奏会

創立 50 周年記念「バッハ 4 大合唱作品 [日本語] 連続演奏」[2]

《クリスマス・オラトリオ》第 I-III 部
カンタータ第 71 番《主は わが君》

光野孝子(S)、佐々木まり子(A)、鏡 貴之(T)、新見準平(B)
東京カンタータ室内管弦楽団
草間美也子(Org)
東京バッハ合唱団、大村恵美子(Cond)

第 107 回定期演奏会を聴いて

●鈴木貞男様

昨夜の杉並公会堂でのクリスマス・オラトリオ、家内共々聴かせていただきました。曲もよかったです、何より新鮮な驚きでしたのが、やはり日本語での演奏でした。違和感を感じるどころか、その日本語の美しさに魅了されてしまいました。

主宰者の大村さんの一貫した信念に大きな敬意を払いたく存じました。合唱のテノールのパートの方々の人数が少ないようでしたので聞く前は少し心配しましたが、始まりますと皆様全体で素晴らしいハーモニーでした。クリスマス生をバッハで楽しませていただきました。

お招きをいただきましたこと、あらためて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

【団員・本田茂樹】今回、元東京海上シンガポール社長の鈴木貞男様ご夫妻（現日本シンガポール協会会長）をご招待しましたが、上記のコメントを戴きましたのでご紹介します。尚、鈴木様も以前バッハを歌っていた方です。



ご支援者、ご愛聴者、月報ご愛読者のみなさま

クリスマス懇親会へのお誘い どなたも、大歓迎!!

- ・日時：2012年 **12月17日（月）**、18時30分より
- ・会場：目白聖公会（月曜日の練習会場）
（新宿区下落合3丁目19-4。JR山手線目白駅下車、「目白通り」を西へ徒歩5分）
- ・内容：食事と懇談、ミニコンサート、ミニバザー
- ・会費：1000円（当日、会場受付にて）
◎バザー用の献品、または料理等1品、お持ちよりいただけるとありがたいです。
- ・参加お申し込み：要予約。合唱団事務局まで
FAX専用 03-3290-5732、メール bachchortokyo@aol.com
電話 03-3290-5731、ハガキ（当月報タイトル囲み内）

後援会員、サポーターのみなさまと団員との交歓の機会です。ステージの顔とは別人の、“生”団員を見物にいらしてください。

創立50周年の今年、夏の創立記念懇親会（7月8日、アルカディア市ヶ谷）は、多くのご来賓、元団員も一堂に会し、華々しく催されました。冬の懇親会は、一転、いつもの月曜の練習会場をお借りして、団員の納会を兼ねた、恒例の手づくりクリスマス会です。どなたでもお気軽にご参加ください。

今年も、演奏会の会計支援を目的に、小さなバザーを併催します。献品とお買い上げ、ご協力よろしく願います。（クリスマス会・バザー係）



■第107回定期演奏会（2012年11月9日、杉並公会堂）

●三谷啓文様

とても一言では言い表せない、バッハの体験をさせていただきました。

もともとの私は、学生時代たった3カ月チェロに取り組んで（指が動かず）挫折したという恥ずかしい体験の持ち主で、ブルックナーやベートーヴェンのシンフォニーコンサートの体験はありましたが、Bachは、ミサ曲のCDを聴いても「宗教音楽」の荘厳と“難しさ”を感じることはしかなかった人間でした。

しかし今回、全く新しいBachの世界を体験することができました。アンケートが書けませんでしたので、お礼と感想を述べさせていただきます。

カンタータの始まりとともに、日本語のバッハが現れました。不思議なことに、全く違和感がなく、むしろはじめて身近にBachを感じる事ができました。ふだん日本語を使っている演奏家の方々によって、心の底から語り出されるBachの世界を、やはり日本語で暮らしている私（私たち）が享受する — 原語の壁を突き抜けたBachの偉大さを感じるとともに、原語を訳詞され、演奏された大村さんの強い意志を感じました。

クリスマス・オラトリオの、弾むような音の波につつまれて、悲しみの先に見える新しい世界の到来を告げるBachの音の大波の中で、私はふっと、3.11の大津波で失われたもの — ここから共に、再び生まれ、よみがえろう、という呼びかけが響き渡るような想いがしました。

演奏そのものも感動的で、Ⅱ部15~16：愛らしく夢の世界に誘うようなフルートをともなったアリアとレチタティーヴォ、Ⅲ部31~33：荘厳でひたむきなヴァイオリン独奏とともにアルト・アリアの喜び — すべてすばらしく感動的でした。私は一夜にして、新しいBach体験、新しい音楽の生活に踏み出すことができました。

なにとぞ、より多くの方々に新しいBachの体験を届けてくださるよう、これからもお元気でご活躍のほど、心から期待しております。

〔三谷啓文様は、平和活動事務局スタッフ〕

東京バッハ合唱団の演奏会に参加して

與語 基宏 (団員)

初めて東京バッハ合唱団の演奏会に参加しました。カンタータ第 71 番はまったく初めてで、「クリスマス・オラトリオ」は日本語では初めてですが、ドイツ語では 2 回経験がありました。日本語で歌い、自らも感動しました。ありがとうございました。

東京バッハ合唱団については、多分 45 年くらい前から知っており、記憶には小林道夫さんの指揮、東京ゾリステン、東京文化会館の小ホールがあります。「演奏会記録 1962-2012」を見て、戸田敏子さん (A)、板橋勝さん (T)、芳野靖夫さん (B)、多田逸郎さん (Rec) らのソリスト、器楽奏者の名前を思い出しました。その頃の友人が合唱団に入っており、野尻湖合宿の様子などを聞き、親しみを持っていました。

日本語でのバッハ演奏では、20 年前に名古屋でコーラスに参加したきっかけが、「マタイ受難曲」演奏への募集で、この曲なら無理をしても参加したいと思い応募しました。この演奏会が愛知県芸術劇場開館記念公演で、ここの大ホールはオペラ用で、当時では日本で 1 番の音響、広さ、設備とされていたように記憶しています。「マタイ受難曲」をまったくのオペラ様式で、暗譜で、日本語で、すべてに演技を付けて行いました。これは 1993 年 2 月の公演でしたので、来年 3 月の東京バッハ合唱団の「マタイ受難曲」は、訳詞は異なりますが、日本語での 20 年ぶりの演奏となります。

今私は、もう一つ別な合唱団 (コーラル・アーツ・ソサイアティ) でベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」の練習をしていますが、この合唱団に参加することにしたのも、6 年前にこの合唱団による「マタイ受難曲」の演奏に感動してでした。

今回の東京バッハ合唱団の演奏会の印象では、日本語であることによって、言葉をしっかりと理解して歌えたことが一番に思います。自分で歌うこともそうですが、特にソリストの歌が、その言葉の響きと意味が明瞭に伝わり、そのことによりストーリーの連続性が常に存在していたと思います。

バッハはドイツ語のテキストに実に的確な音楽を付けているので、テキストと音楽の進行が非常に緊密で、また躍動感があると感ずります。これには、ドイツ語の子音の活かし方が特にリズムにおいて素晴らしいと思います。日本語では母音が中心となるので、おそらくは自分に聞こえる以上にリズムが甘くなりやすく、またそれが結果的には柔らかく響いたということもあるかと思ひます。

音符のほとんど一つ一つに一語の母音ののる日本語で歌うむつかしさも改めて感じましたが、一音ずつを明瞭に発音するソリストの歌に解決策があるかと思ひられ、自分なりの工夫をしたいと思ひました。

荻窪教会
クリスマス・コンサート

J.S. バッハ
《クリスマス・オラトリオ》I-III
日本語演奏

フルーツ ● 山田恵美子
チェロ ● 船田裕子
オルガン ● 金澤亜希子
合唱/独唱 ● 東京バッハ合唱団
指揮/訳詞 ● 大村恵美子

12月25日
19時開演 (21時終了)

<入場無料>

会場=日本キリスト教団・荻窪教会

●会場へのご案内
JR 荻窪駅/東京メトロ丸の内線荻窪駅下車、南口より徒歩 8 分。駐車場の用意はございません。お車での来会をご遠慮ください。電話 03(5398)2104 千167-0051 杉並区荻窪4丁目2番地10号

●主催/お問い合わせ=東京バッハ合唱団
"バッハを日本語で歌っています。ご参加ください"
練習=土曜日 15:30-17:30、荻窪教会 (当教会)
月曜日 18:30-20:30、目白聖公会 (京目白駅下車)
Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732 (専用)
mail: bachchor-tokyo@aol.com
詳細は <http://bachchor-tokyo.jp/>

会場アンケートより

<演奏全般について>

- ・とっても良かったです。合唱は後半になってエンジン全開したように思いました。特筆すべきはアルトのソロです。聴きごたえありました。とくに No. 19 と 31 のアリアは圧巻でした。また聴きたい、もっと聴いていたいと思ひました。みんなで歌う曲、照明ついて歌えてラッキーでした。
- ・練習を積まれていることがよく伝わり、まとまっていた。
- ・いつもながら、力強いすばらしい演奏です。心が洗われました。No. 29 の二重唱は心に沁みました。

<とくに、日本語演奏について>

- ・日本語なのでよくわかりました。わかることは大切ですね。
- ・日本語ですよ？ 日本語でも子音をもっと立てないとわかりません！
- ・せっかく日本語で歌うのですから、もう少し、いやもっと日本語が伝わるように心を込めてことばを大事にうたってほしい、とくに合唱。ソリストの日本語は美しかった。
- ・バッハの音楽を少しも損なうことなく素晴らしい翻訳、特に無声子音の扱いは白眉です。それを見事にこなした歌い手も見事！

<その他、運営全般について>

- ・50 年も続けられるとは……おどろき、おめでとうございます。
- ・Cafe は休憩時に開店することをきちんと伝えてほしかった。

年賀状に代えて

今こそ、故国存亡の正念場

大村 恵美子 (主宰者)

21世紀を迎えたとき、私たちは、戦争のない「ヨベルの年」が地上に実現し、世界中の人心が一新されるというような奇蹟も、あるいは起こりうるのではないかと、内心では一大期待を寄せてもみました。前の世紀、たてつづけに2回も世界大戦を重ねた人類は、さらに同じことをくり返す愚者にとどまるのか。

ところが、くり返しではなく、もっと悪い、世界中飛び火だらけの状態になって、個別的果し合いの同時多発が地球一帯を蔽うようになったのです。

こんな中に呼吸する私たち個人は、1) 諦めに徹して無為にすごすか、2) 自分の好きなことにうずくまって、他には無知のまま、死ぬまで快樂主義に浸ってゆくか、3) 無知にはちがいがなくても、理想をかかげて、自分が使命と信ずる生き方を追求してゆくか — そんな選択の課題を負っています。

私も含めた高齢層は、「どうせもうすぐいなくなるのだから、先のことを考えても無駄」などと、よく言い合います。しかし、実際には、福島事故で国土の3%が失われ、放射能で故郷に住めなくなった10数万人の方が残されている現在、私たちの生活も、ただこれまで通りに、たとえば合唱団を護り、バッハを歌いつづけて、あとはなにも考えないでいけばすむ、と開き直ってはいられません。

大阪の橋下徹が国政関与にとりかかり、さらに東京の石原慎太郎が知事職をほうり出して長年の総理大臣への執念実現に踏み出したのをみて、これは一吹き目の泡沫か夢だったと過ぎ去るのならともかく、そこにぐぐっと民意が集中して、あらぬ方向に道がひらかれたら、と鋭い危機を感じました。

なるべく生半可な興味で時事問題の本は追わないようにしている私ですが、この時点で、何かを足掛かりに読んで、覚悟を固められないものかと思ひ、順当な判断かどうか分かりませんが、とりあえず、今ベストセラーの新刊、孫崎享『アメリカに潰された政治家たち』(小学館)を読んでみたのです。著者は、ウズベキスタン、イランなどの駐在大使を歴任、国際情報局長もつとめた人物だそうです。この手のセンセーショナルな著作の危うさを認識したうえで、以下に、興味をひいた箇所を紹介します。

「アメリカと戦った12人の政治家」として、鳩山一郎、石橋湛山、芦田均、重光葵、岸信介、佐藤栄作、田中角栄、竹下登、梶山静六、橋本龍太郎、小沢一郎、鳩山由紀夫が扱われます。それぞれが、時の政策の中で、アメリカにとって都合が悪くなると、CIAその他の隠然たる力によって潰されていった、という立論です。

同書の最後に、著者と長谷川幸洋氏(東京新聞論説副主幹)、高橋洋一氏(元財務官僚)との鼎談「2012と1960、国民の怒りが政権を倒す日」を載せていますが、そこで現在もつづいている官邸包囲デモを重視し、「反体制の意志を表示することには恐さがあるが、それが今回のデモで、恐くない、意思表示していいんだ、というきっかけになった」と評価しています。「長谷川は脱ポチ(アメリカの奴隷)、高橋は脱官僚、孫崎は脱アメリカ。そうした〈脱〉の動きがさまざまな場所で起こっている。これまでは政治家がアジェンダを設定して国民に示したが、今は逆に、政治にたずさわっていない一般の人々が脱原発というアジェンダを政治に突きつけている。これは非常に大きな転換。」「いま政治家に求められる条件とは、1) 修羅場から逃げない、2) 若い候補である、3) 国民が求めている[下記の]3つを断固やる：①原発再稼働反対、②消費増税反対、③TPP反対。そして、選挙民の半分である女性を指導者に。女性候補は風を吹かせる可能性を持っている。60年安保は、アメリカの策略で“同士討ち”をさせられ、共倒れした事件だ。現在はまさに歴史的な転換点。日本は本当の意味での〈戦後〉に終止符をうち、新たな地平が開ける」と主張しています。

この本がどれだけの、正当性のあるものなのか分かりませんが、少年期以来、東京で戦後生活をたどってきた私には、身体で納得するところが多い。いずれにしても、判断停止の状態、酔生夢死のままこの世に別れを告げよう、つまり孫子(まごこ)を正視しないで逃げよう、とせず、最期まで人生の誠実をつくそうと、それぞれに決意をあらためて、新年を呼び込むべきだと思います。

年末年始と2013年の活動予定

年内練習は、

12月10日(月)、15日(土)で終了

12月17日(月) **クリスマス懇親会**……【p.2に詳細】

12月25日(火) **荻窪教会クリスマス・コンサート**

……【p.3に詳細】

2013年

新年練習開始、

1月12日(土) 荻窪教会、14日(月) 目白聖公会

◎《マタイ受難曲》への新規参加(経験者)を歓迎します。お問い合わせください。

2月24日(日)「合唱と聖書朗読による《マタイ受難曲》」
カトリック百合ヶ丘教会(川崎市麻生区)

3月30日(土) **第108回定期演奏会**《マタイ受難曲》
紀尾井ホール(千代田区紀尾井町)

※参考：前日29日は聖金曜日、翌日31日は復活祭

◎4月1日(月)より《ヨハネ受難曲》と《クリスマス・オラトリオ》後半の平行練習開始。《ヨハネ》公演は2014年春です。

8月上旬、野尻湖コンサート&合唱

12月7日(土) **第109回定期演奏会**《クリスマス・オラトリオ》IV-VI、カンタータ BWV 76《主の栄光を天は語り》。杉並公会堂